

”のぞみ”のまえに

合格という
「頂」を目指して



*Piz Bernina
photo T. Maeda*

難関国・私立中受験専門スーパーエリート塾

のぞみ
希学園

●CONTENTS

- 1) 希学園に来るまでに何をしていたら良いの？
- 2) 希学園に行かせるまでに何をさせておいたら良いの？
- 3) 希学園で塾生の皆さんに大切にしてもらっていること
- 4) 国語の学習方法
- 5) 算数の学習方法－低学年－
- 6) 算数の学習方法－難関中合格に向けて－
- 7) 理科の学習方法
- 8) 社会の学習方法
- 9) 小2小3公開テストについて



希学園に来るまでに 何をしていたら良いの？（小学生のみなさんへ）

「計算練習をしっかりとやりましょう」

算数の計算はとくいですか？

計算はなんどもなんどもやることで、かならず身につきますよ。

スピードもあがってきます。

今は苦手でもこつこととやっていきましょう。

じつは、計算はとっても楽しいですよ。

「漢字の書き取りや、ことばの数をふやす努力をしましょう」

漢字の書き取りや読みの練習をしましょう。

書き順をおぼえることも、とても大切です。

漢字やことばをおぼえることは、文章を読み取る力につながる大切なことなのです。

「読書をすすんでみましょう」

本は好きですか？

本を読んで、いろいろなお話を楽しみましょう。

自分の知らなかった世界をどんどんさがしてください。

物語だけでなく、科学的な読み物にもチャレンジしてみましょう。

そして、本を読んだ感想をおうちの人にどんどんお話してみましょう。

「自分のことは自分でしましょう」

じぶんで、明日の用意はできますか？

おうちの人にやってもらえばかりではなく、

じぶん一人でやってみよう、とする気持ちが大切です。

わすれものをしないようにちゅういができるようになることも大切です。

「体力をつけておきましょう」

勉強は、体力をつかいます。

今のうちは、外で元気いっぱい遊んで、

思いっきり体をうごかしましょう。

つかれたら、ぐっすりねむりましょう。

よふかししないで、しっかりねむることも大切です。

希学園に行かせるまでに

何をさせておいたら良いの？(保護者の皆さまへ)

「学習＝机の上」ではない

子どもにとって、身の回りのものすべてが「学習」の対象です。大人にとっては当たり前となっている日々の生活や感覚をいかにして伝達していくか、を意識しましょう。

子どもは、机の上だけで学習するものではありません。生活の中で学習していくものです。例えば、お金や時計は、日常生活の中で、最も身近な算数的要素です。小銭を手にするこで5のかたまり・10のかたまりを意識することができますし、時計の盤面を見ることで角度を視覚的にとらえることもできます。電子マネーやデジタル時計が普及して久しいのですが、子どもと算数の接点として、疎かにはしたくない部分です。

この他にも、カレンダー・靴のサイズ・体重・ペットボトルの容量等、生活の中に多くの学習素材が存在します。

ことばの数をふやす

まずは、「会話」です。子どもの知らない語句や話題をあえて会話に取り入れ、そして子どもに十分に発言させましょう。ことばは、聞いて・身につけて・使いこなすことにより定着します。子どもの話を大人が引き取り、要約して話を手短かにまとめてしまうことは、あまりおすすめできません。子どもに話をさせると途中で主語が入れ替わったり、時系列が逆転したり、いきなり主題が変わったりすることはよくあります。要領を得ない場合は、子どもが返答しやすいように問い返す、という作業を繰り返すと良いでしょう。

読書をすすめる

語彙力を高めるためのもうひとつの手段が読書です。現実には見聞きすることのできない世界も、のぞき見ることができます。分野にはあまりこだわらず、手当たり次第の乱読でも構いません。文字から情報を拾いあつめる力は、国語に限らず学習全般に影響を与えます。

計算に取り組ませる

計算力は算数力に直結します。速度と精度の両立が必要ですが、この両立はなかなか難しいものです。一朝一夕に身につくものではないので、根気強く、訓練を積むことが肝要です。

また、間違えた問題のやり直しも重要です。くりさがりを間違えたのか、計算の工夫に気づいていなかったのか、筆算をしなかったことが原因なのか……、やり直しをすることで、次の問題の速度も精度も進歩します。

教材は市販のドリルで構いません。どんどん上の学年の教材に進みましょう。

「考えさせる」

「できたか・できなかったか」ではなく、経緯を確認してください。たまたま同じ答えになっていても途中の思考回路に誤りがあれば理解には至っていませんし、最後の詰めを誤って違う答えになっても思考の方向性があるれば、理解はしています。

「なぜそう考えたのか」を子どものことばで説明させることが重要です。これにより、子どもの頭の中で整理整頓が行われていきます。

「書かせる」

子どもの頭の中はおもちゃ箱です。いろいろなことを思いつき、自在に結びつけ、のんびり文字に書き起こしている時間の余裕などはありません。「きれいに書きなさい」と制限すると、発想力にマイナスの影響を与えかねません。「きれいな字で丁寧に書く」「解読できる程度の字で書く」の使い分けをさせることが現実的でしょう。

きれいに書くことにこだわるあまり「考えがまとまらないから書きだすことができない」という子もいます。最終的には「書きつけながら考えをまとめていく」としたいものです。

自立心を養う

持ちものの管理・身の回りの整理整頓は、低学年のうちから習慣づけましょう。忘れものをした理由を聞くと、「お母さんが入れ忘れたから」と返答する子どもは少なくありません。一緒に行くところから始めて緩やかに移行し、本人に任せるように、保護者の方は事前の声かけや、子どもに見えないところでのフォローに留めましょう。

時間を上手に使わせる

長い時間机に向かうことが学力向上を促すわけではありません。緩急が重要です。低学年の子どもの集中力は、だいたい30分程度です。やりたいことであればもちろん長く集中しますが、「やりたいことをやっている」にすぎません。「○○を○分間やる」「△△を△時△分までに終わらせる」のように時間を区切る習慣をつけることが、先々のスケジュール管理につながります。

この時間設定は、子ども自身に決めさせましょう。押しつけられたことではなく、自身が設定し、交わした契約であると認識させることが重要です。

体力をつけさせる

健全な精神は健全な肉体に宿ります。中学受験を乗り越えるためには、強靱な精神力が必要です。自身の弱い気持ちに打ち勝つ「克己」の精神です。

子どもの体力は、存分に駆け回って遊ぶことにより養われます。これは習い事としてのスポーツとは別のものと考えましょう。そしてよく眠りましょう。よく学び、よく遊び、よく食べ、よく眠る。いずれも低学年の子どもにとって重要です。

希学園で塾生の皆さんに 大切にしてもらっていること

ちゅうがくにゅうし む がんば のぞみがくえんじゅくせい みな ぜ ひ たいせつ
中学入試に向けて頑張っている希学園塾生の皆さんに、是非大切にしてほしい
ことが3つあります。すでに意識してくれているという皆さんもたくさんいると
おもいますが、なぜそれが大切なことなのかの説明しますので、しっかり読んで
あらためて大切にしてください。

学園長 黒田 耕平



げん き
元気よく

あい さつ
挨拶をしよう!



あいさつ たいせつ
挨拶をすることはなぜ大切なのでしょう。

それは、挨拶は「人と人とのつながりを作るスタートになる大切な行為」だからです。

みな とう かあ かぞく まも せいかつ ともだち
皆さんはお父さんやお母さんなどの家族に守られて生活をしています。そのため、友達
せんせい かぞくいがい ひと むり つく こま
や先生たちのような家族以外の人とのつながりを無理に作らなくてもそんなに困らない
おも せんせい かぞくいがい ひと みな しょうがくせい けいけん
と思うかもしれません。しかし、皆さんは小学生で、もっともっとたくさんのことを経験
まな だんかい まな おお ひと
して学んでいかなければならない段階にいます。その学びの多くは「人とのつながり」から
え
得られるものですから、そのつながりが多ければ多いほど人生は豊かになります。つまり、
ひと たいせつ かんが も さまざま きゆう
「人とのつながり」を大切にするという考えを持つことができなければ、様々なことを吸
しゆう あいて ふ せいちよう おそ
収できる相手を増やすことができませんから、成長のスピードが遅くなってしまいます。

また、挨拶の大切さをわかっていたとしても、「めんどくさい」「はずかしい」という
りゆう こうどう うつ ひと き ちい こえ あいさつ ひと
理由で行動に移せない人や聞こえないような小さな声でしか挨拶できない人もいると
おも ひと じぶん せいちよう じぶん やぶ
思いますが、その人は「自分の成長のために自分のからを破ることができていない」わけ
ひと よわ あらわ
ですから、人としての弱さの現れでもあります。

このように、「元気よく挨拶ができる人になる」ことは、考え方の面でも行動力の面でも
みな せいちよう おお し あいて たい
皆さんの成長にとって大きなプラスになるのです。すでによく知っている相手に対して
つく ひと たい せっきよくてき げん き
はもちろんのこと、これからつながりを作っていくような人に対しても積極的に元気に
あいさつ
挨拶をしましょう。

ルールやマナーを

まも 守ろう！



ルールやマナーを^{まも}守ることはなぜ大切^{たいせつ}なのでしょう。

実はこのことも「人と人とのつながり^{たいせつ}を大切^{こうい}にする行為」だからなのです。

皆さんはまだ子どもですから、感情のままにやりたいことをやりたいようにしてしまいがちです。一人しかいない空間であれば何をしようかと構わないかもしれませんが、自分以外の多くの人も利用している空間で、それぞれの人が皆自分勝手な行動をすれば、お互いがお互いに迷惑を掛け合うことになり、その空間は大変居心地の悪いものになってしまいます。だから、**多くの人が利用する場には「ルール」や「マナー」があるのです。**

したがって**通塾時の電車の中や駅のホームなどで自分勝手な行動をとるとするのは、「自分以外の人たちの存在」を考えられていない証拠なのです。**

また、皆さんは中学入試を目指して日々努力していますが、**入試ではまさにルールやマナーを守る力が要求されます。**問題文に書いてあることを自分なりに解釈していたり、自分の思うがままの答えを書いたりしても、指定されたルール通りに考えたり答えたりすることができていなければ、点数はもらえません。さらに入試には制限時間というルールもあり、試験時間以外でも他の受験生の足を引っ張るような行為はしないというマナーも当然あります。指定されたルールやマナーをどれだけきちんと守ることができるかで合否が決まります。

ですから、なぜそのルールやマナーがあるのかをきちんと理解して、それを守り抜く力を身につけることは、人として大切な考え方であるのももちろんのこと、受験生としても極めて重要なことなのです。

カンニングは

絶対にダメ！



テスト中に他人の答案を見ってしまうカンニング行為は当然ルール違反ですが、入試においてはカンニングと「疑われる」行為だけで不合格になります。厳しいと思うかもしれませんが、これには、決められたルールを守れないからダメということにとどまらない、もっと深い理由があるのです。

皆さんは受験生の立場ですが、逆に入試を実施している学校の先生の立場で考えてみてください。先生方はそれぞれの受験生がどのような力を持っているのかを正しく見極めたいので入学試験を実施しています。にもかかわらず、自分の力だけで正々堂々と勝負せずに、他人の答案を見るというずるい行為をするというのは、自分が合格できれば何でも良い、ばれなければ良いという自分勝手な行動であり、学校の先生方の考えや気持ちを全く理解できていない、完全に信頼を損なう行為なのです。そのような考え方の受験生を入学させる訳にはいきません。だからこそ、厳しい対応になるのです。

つまりカンニング行為の有無は、単にルールを守れるかどうかだけではなく、受験生としても人としても絶対に大切にしなければならない「相手の立場で考えること」や「誠実さ」の有無の評価につながるのだという重みを感じてもらいたいです。

国語の学習方法

読書

読む量と国語の成績はある程度比例する傾向もありますが、「読書量は多いのに成績につながらない」という子どもも少なからず存在します。原因として考えられるのは①本のレベル、②分野の偏り、③読み方でしょう。

- ①レベル：無理なく読むことのできるものよりも、やや難しいものを対象としてください。ところどころわからないところがあり「あれ？」と思って読み返す、読み終えた本でも二度三度繰り返して読むことで新しい発見がある、そのような読書を目指しましょう。
- ②偏り：好きなものだけ読み続けると、物語文には強いが説明文には弱い（あるいはその逆）、ということにもなりかねません。読書は、「現実には見聞きすることのできない世界をのぞき見る」というのが本来の目的の一つです。偏りは、この魅力を損ないかねません。
- ③読み方：空想や先入観をまじえず、「書かれている通りに理解する」ことが読み方の基本です。もし〇〇ならどうなったか、自分ならどうするか等を考えるのは楽しいものですが、国語としての「読む力」にはつながりません。

活字に全く触れないよりは、どんな形でも触れた方が良いので、マンガも選択肢にはなり得ます。ただしこれは「きっかけ」です。文字を介さずに理解しようとする習慣がつき易いので、程よい段階での切り替えが必要です。

読むことと書くこと

言語を運用する能力の基本である「聞く－話す」（4歳～5歳で獲得）を、「読む－書く」能力に発展させるのが小学校での国語教育の目的であり、中学受験で問われるのも「読む力」「書く力」です。このいずれが欠けても、国語力はつきません。算数は、「問題を解く」ことが学習の中心になりますが、国語は「問題を解く」以前に「問題を読む」ことが学習の中心になるのです。読まずに解く、あるいは読めないまま解くことに、学習の意味はありません。

読む力

第一に、読む文章の絶対量が重要です。乱読で構いません。乱読によりむしろ、極端な偏りを回避することができます。様々な人間像・世界観に触れることで、文章読解の前提となる知識を増やすことができます。これにより、筆者がより高次の内容を展開したとしても、ついていくことができるようになります。

次に、同じ文章を繰り返し読むことが重要な意味を持ちます。「無理なく読むことのできるものよりも、やや難しいもの」を繰り返して読み、わからなかったところがわかるようになって知識として定着し、以前は気づくことのなかった視点を発見して世界が深まるのです。

語彙力

子どもが「読めない」「読んでもわからない」というときには、その文章の中に「知らないことば」があることがほとんどです。語彙を増やすためには辞書の活用が有効であるとよく言われますが、時間ばかりかかってほとんど効果がない、という印象をお持ちの方もいらっしゃるのではないのでしょうか。ことに、子どもは辞書をひくことを面倒だと言って回避することが多いです。

辞書による学習を効果的にするには、「辞書を引く前に見当をつける」「調べたあと文章の中で確認する」ことが重要です。ことばは、文脈の中で意味を持つものであり、文脈から切り離してただ暗記するものではありません。

辞書などあまりひかないけれど語彙力は豊富、という人は、「読む力」があるため文脈からことばの意味を類推することができ、文脈の中で、未知のことばを既知のことばに変換する作業ができています。「読む力」次第で辞書の有用性も変化します。

音読

低学年、あるいは国語が苦手な子どもの学習方法として、しばしば音読が推奨されます。もちろん最終的には黙読による理解に到達しなければなりません、トレーニング手段として音読は非常に有効です。

大人でも、声に出して読んでみることで文章の正誤や違和感に気づくことは多々あります。仮に音読はしていなくとも、物理的に音声として外に出していないだけで、頭の中で自分の声を聞くような読み方をしていることが多いのです。

子どもに音読をさせ、大人は何か別の作業をしながら耳だけで子どもの状況をチェックすることも可能です。子どもは、特に助詞や接続詞等、驚くほど読み間違えをします。是非お試しください。

書く力

書くことができない、記述が苦手という場合は、以下の3パターンのうちいずれかです。

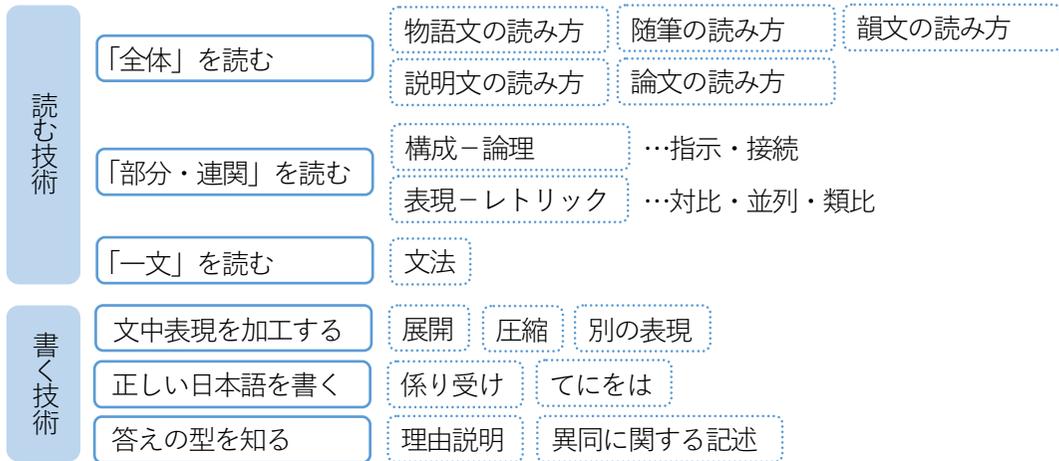
- ①全く書くことができていない。
- ②書けているが×になっている。
- ③書けているが△になっている。

①と②の場合、「記述が苦手」なのではありません。「読むことができていない」のです。多くの記述問題は、本文中の語句を用いて解答するものです。従って、本文中の適切な個所を見抜くことができれば何らかの答えを書くことはできますし、適切な個所を見抜いていればなかなか×にはなりません。「読む力」のトレーニングが必要です。

③の場合は確かに、記述が苦手であるのかもしれませんが。適切な個所を見抜いているのに、正しい日本語を書くことができていないために、あるいは言葉が不足しているために減点されている可能性があるからです。

読む技術・書く技術

以上をもとに、希学園では「読む技術」「書く技術」を系統立ててカリキュラムを編成しています。相互に深く関連しますが、いちどきには与えず区別して教授し、どう関連しているのかを教えていきます。子どもは、二つ以上のことを同時に考えることが苦手だからです。



読む技術

- ①「全体」を読む
物語文や随筆、説明文といったジャンルにはそれぞれ固有の構成があり、そのジャンルならではの読み方を必要とします。
- ②「部分・連関」を読む
指示や接続といった関連の仕方、対比構造や並列構造、類比構造等に注目して文章を整理する方法、あるいは比喩のような表現技法に関する知識を学びます。
- ③「一文」を読む
いわゆる文法です。一文の係り受け(主語－述語－修飾語)を正しく理解しなければ、文章全体を読み誤ることになります。

書く技術

- ①文中表現を加工する
本文中の簡略な表現を必要に応じて具体化・詳細化する「展開」、あるいは重複表現の一方を省いたり、具体的な表現を抽象化したりする「圧縮」、自分なりに別の語句を用いて別の表現にする等の加工方法があります。
- ②正しい日本語を書く
係り受け(主語－述語－修飾語)や「てにをは」等に注意して、正しい文にします。
- ③答えの型を知る
設問によって答えの型を判断し、その型に合わせた答えを書きます。
例：「なぜおどろいたのですか」→「のから。」

算数の学習方法 - 低学年 -

動機づけ

低学年の間は、「〇〇中学に合格するために△△をがんばる」という動機づけは難しいでしょう。そもそも学習というものは、「合格するためにやるもの」ではありません。高学年になり、受験学年になり、入試が現実のものとして眼前に迫ってきたときに、「今はつらいけれど、目標のために、克己の精神で乗り越える」ことがようやく可能になります。

まずは「なるほど！ わかった！」という知的感動体験を重視しましょう。子どもは「できるものは好き、できないものはイヤ」であることがほとんどです。「今できるもの」よりも少しだけステップアップした問題に取り組み、間違え、再挑戦し、理解し、またその次へ……と、好奇心をくすぐりながら進ませましょう。

「やる気」

子どもの「やる気」は安定しません。気乗りがしないときに何かを教え込もうとしても、問題は目に入りませんし、大人のおだても叱責も耳に入りません。これを続けると、そもそも学習というものが「嫌なもの、がまんするもの」として刷り込まれてしまいます。「なるほど！ わかった！」という知的感動体験にはほど遠い状態です。

低学年の間は、学習していると意識させないままに学習させることをおすすめします。親子で競争する、親子でチャレンジする、パズル・ゲーム形式を導入する、等です。

計画性を持たせる

子どもは「やりたいこと」であれば、それが学習であっても、長い時間机に向かうことができます。しかし学年が上がるにつれて、「やりたいことをやりたいだけ続けることのできる時間」は減ります。そうなったときに、時間を区切って学習する習慣のついていない子どもは、時間の使い方であらゆる苦しみになります。

まだ時間の余裕のある低学年だからこそ、「〇〇を〇分間やる」「△△を△時△分までに終わらせる」「もっとやりたいけれど時間だからおしまい」のように時間を区切る習慣をつけることが大切です。

自信を与える

悪いことをしたら、叱責も必要です。しかし低学年の学習において、「できなかったこと、間違えたこと」は「悪いこと」なのでしょうか？ 我々はそのようには考えません。できなかったことはできるようにすれば良いですし、間違えたところは次に間違えないようにするための貴重な財産です。「なんでこんなのもわからないの」「なんでまた同じところで間違えるの」と否定が続けば子どもは自信を失い、それは学習効率を著しく低下させます。低学年の学習では、自信を持たせることが非常に重要です。

丸つけ、やり直し

丸つけは、低学年の間は保護者の方がなさってください。正答にたどり着けていない場合、原因は大きくふたつに分かれます。間違えたのか、知らなかったのか、です。低学年の子どもが丸つけをしても、この区別をつけることができません。子どもは間違えた事実から目をそらしたいので、やり直しを嫌がります。間違えないようにするために、どこに・どこで気をつければよいのか一緒に考えてあげましょう。

「バツは未来のマルにつながるもの」という認識を低学年のうちから持たせることに成功すると、高学年になったときに見違えるように成長します。



算数の学習方法 – 難関中合格に向けて –

出題タイプ

算数の問題を大きく分類すると、以下の3つになります。

- ①計算力やパターン問題
- ②作業力を要する問題
- ③思考力を問う問題

年度により、あるいは学校によりこの比率は異なりますが、一般的な学校では「①計算力やパターン問題」が多く出題されるのに対し、難関中・最難関中では「②作業力を要する問題」「③思考力を問う問題」の比率が高まります。難関中に通用する算数力を培うには、「計算力の強化」「基礎知識の定着」「思考力・作業力の養成」が重要なポイントとなります。

計算力の強化

●集中力

時間を区切って集中して取り組むことから始めます。「昨日は5分かかったから今日は4分を目指す」のように、具体的に目標を設定することで成果が出ます。一日5分～10分程度で十分です。計算に関しては、一日の練習量を増やすと集中力が低下し、効果につながり難いです。毎日必ず決まった時間に、と習慣づけましょう。

●速度と精度

時間を短縮しようとするミスが増え、正確に解こうとすると時間がかかる、どのように克服すべきか、というご質問をよくいただきます。両方を同時に鍛えるのは難しいので、日によってスピード重視の日と、正確さ重視の日を分けてテーマを決めて訓練をしていくこともひとつの方法です。正確さやスピードは一朝一夕に身につくものではないので、根気強く、訓練を積むことが肝要です。計算ミスの多い子どもは、位をそろえて書かず、字を雑に書くために自分の書いた数字を読み間違えて次の計算に進んでしまうことも原因の一つと考えられます。

●常に工夫を考える

ア) $14 + 925 + 86$ ……先に $14 + 86$

イ) $3.14 \times 24 + 76 \times 3.14$ …… $(24 + 76) \times 3.14$

ウ) 64×0.125 …… $64 \times \frac{1}{8}$

エ) $\frac{1}{2 \times 3} + \frac{1}{3 \times 4} + \frac{1}{4 \times 5}$ …… $\frac{1}{2} - \frac{1}{5}$

上記の例は、いずれも基本的なものばかりです。毎日の計算で、常に工夫を考えていく習慣をつけましょう。授業でも取り扱う機会があります。

基礎知識の定着

面積を求める「公式」や、割合に代表されるような「概念」の知識、解法そのものが定石として決まっている、所謂「パターン問題」等、様々な「基礎知識」があります。これらは演習の中で身につけていくものですが、考え方を身につけ、思考のつながりを重視する必要があります。特殊な内容の知識を低学年のうちから詰め込んでしまうと、一見、難解なものまで解くことができているように見えて、実は思考の積み上げがない故に、学年が上がるにつれて見えない壁に行きあたってしまうことが、少なからずあります。

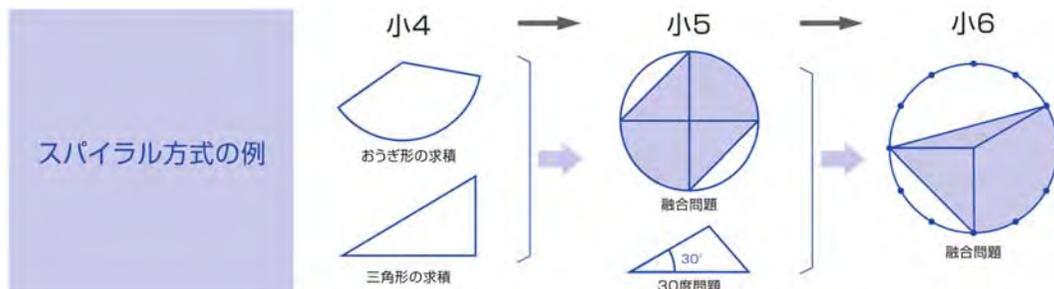
ポイントは、以下の2点に尽きます。

●基本問題の演習

式・図等を書きながら、思考のつながりを途切れさせることなく、くり返し演習を行い、基本事項を定着させましょう。子どもの「できた！ わかった！」は、論理の飛躍を含むこともよくあります。

●スパイラル方式

学年ごとにレベルを上げながら反復練習・類題練習を重ねることで、得た「基礎知識」の「使い方」を身につける必要があります。



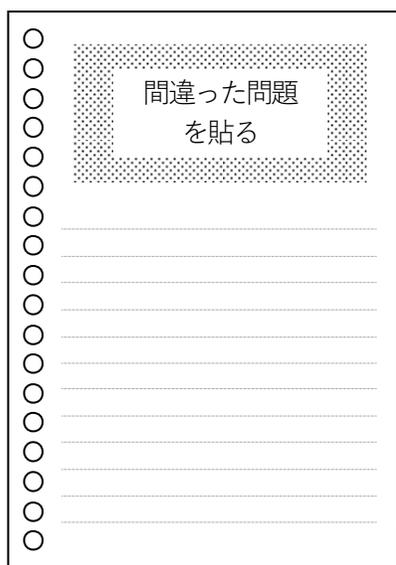
思考力・作業力の養成

「基礎知識の定着」は「解法」という引き出しを作り、その開け方を練習した状態です。難関中では、この引き出しの探し方・組み合わせ方を理解しているかどうか問われます。問題文から条件を選び出し簡略化し、整理した後の段階です。

過去の練習から培った様々な解き方が、その問題に適しているか否かを「試す」ことになるのですが、この試行錯誤こそが思考力を養います。「知識」という「点と点」を様々に結び、網目のように張り巡らされている状態が理想です。時には、点と点を結ぶ線が絡まっても構いません。「引き出しの選択や組み合わせを誤った、この考え方では解くことができなかった」という経験を奪うと、思考力は伸び悩みます。

絡まった場合は、解法の再選択(もう一度引き出しを探して組み合わせる)です。「誤った選択に至った履歴」があれば、そこから分岐して思考を進めることができます。つまり「解き方」を書き残しているか否かが重要ですが、図や式や表を書かずに解き進めることが習慣づいている子どもの場合、どこで道筋を誤ったのかを見定めることができず、出口の見えない迷路に迷い込むこととなります。

算数やり直しノート(難問集)



テストで間違えた問題や、わからなかった問題をひとまとめにしておくことで、やり直しに取り組みやすい状態を作ります。

- ①ルーズリーフ(上部)に間違えた問題を貼る。
 - ・ 1枚に1問のみ貼る。
 - ・ 裏には解答・解説を貼る。
 - ・ 間違った時の書き込みは消さずに、そのまま貼る。
- ②ルーズリーフ(下部)にその問題を解く。
- ③解くことができるようになったページは、ファイルから外す。
- ④積み残すことのないよう、定期的に取り組む。

裏面には
解答・解説を貼る。



理科の学習方法

知識を増やす

知識なしでは思考できません。まずは知識を増やすこと、つまり暗記です。最も効率の良い方法は、うまく動機づけをすることです。興味を持っていることであれば吸収率は良いですし、なかなか忘れません。低学年は「受験」を意識させることが難しいので、動機づけが重要になってきます。

①参考書より図鑑

カラー写真をふんだんに用い、説明も詳細であるものが多いです。小学館の「NEO シリーズ」や、全国農村教育協会の「校庭シリーズ」は身近な植物がよくまとまっています。

②実物に触れる

実物を見たり触ったりすると、記憶に強く残ることが多くなります。水族館や植物園も良いですが、公園やスーパーでも身近な草花・魚・野菜・果物等に出会えますし、季節の感覚も身につきます。

また、中学入試における天体の単元は主に小学4年配当です。低学年のうちから「冬が近づいているから暗くなるのが早くなったね」「あれがオリオン座だよ」という会話をすることにより、「身のまわりのものを、ただ素通りさせず気にする」感覚を身につけさせることができます。

知識を分類する

暗記は得意・不得意が分かれます。興味の有無や反復の努力量のほかの要素として、「分類」があります。得意な子どもは同じことをまとめて（分類して）覚え、苦手な子どもはばらばらで（1対1対応で）覚えようとします。

例えば「問：カメはどこで呼吸していますか（答：肺）」とあるものに対して、「カメは肺で呼吸している」と覚えるのは正しいとは言えません。時間が経ってから同じ問題を解くとき、「カメは水中で生活しているから、えらかな？」となりかねないためです。

この場合、合理的な暗記の仕方は「カメは、は虫類である」「は虫類は、肺で呼吸する」です。これにより、知識がカメ単独から、は虫類全般へと広がります。

知識を使って考える

問題を解くときには「問いと答えを結びつけるのに必要なもの」を頭から引き出す必要があります。「問題」は3つに分類されます。

- ①ひとつの知識で答えを導くことのできる「暗記問題」
 - ②法則・公式を使って、計算の作業を伴う「計算問題」
 - ③複数の知識を用い、多段階のステップを踏む「思考力問題」
- } パターン問題

理科の入試は、ほとんどの学校で解答欄には答えしか書きませんが、きちんと解き方を守らなければ正解にはたどり着きません。「解き方を守る」とは、「過程を大切にすること」です。

ア) 先生の解き方のまねをする。

教えられた解き方を守らずに自分勝手な解き方をしていると、基本問題は解けても応用・発展問題には対応できなくなります。小6で学力が低下する要因のひとつです。

イ) 解き方を丁寧に書く。

「思考力問題」は答えを選択肢から選ぶ問題も多いです。子どもは選択肢問題を勘に頼って答えてしまうことがあります。また、「A だから B、B だから C」と思考を多段階で行う問題でも、「A だから C なんだ」と暗記問題として捉えがちです。「思考力を身につける」とは「なぜその答えになるかの過程を理解すること」です。

知識なしで考える

自分が知らない問題が出題されると、「習っていない」として思考することを放棄する子どもは、少なからずいます。そして、そこを突いてくる学校が増えてきています。予備知識がない問題で、条件を与えてその場で考えさせる問題です。しっかり問題を読むことと、条件を整理する力が重要になってきます。

西大和学園中入試から抜粋

海や川などにすむ生物の体内の液体と、体外の液体（海水や川の水）の濃さの関係を調べて図2を作成しました。

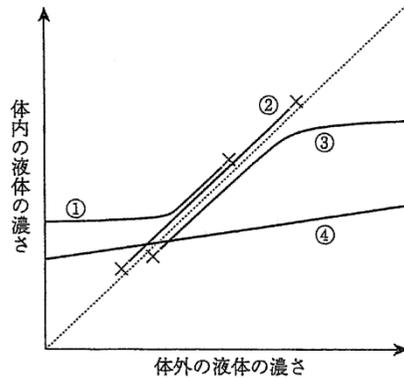


図2 図中の×は生存できないことを示しています。

- (1) 水の出入りの調節をまったくしていない生物は図2の中のどれですか。番号で答えなさい。
- (2) 川の水でも海水でも水の出入りの調節ができる生物は図2の中のどれですか。番号で答えなさい。
また、そのように調節できる生物名を1つ答えなさい。
- (3) 川で生活している生物は図2の中のどれですか。番号で答えなさい。

問題は少し難しく感じるかもしれませんが、

- (1) 「体外の濃さ＝体内の濃さ」だから、②になる。
- (2) 体外の濃さがどんなときでも生存するので、グラフに×がないので、④になる。
もしくは、体外の液体の濃さに関係なく体内の液体の濃さがほぼ一定で④になる。
- (3) 体外の濃さがうすいときだけ生存するので、①になる。

この問題のグラフを見たことのある受験生は、ほとんどいないでしょう。しかし、グラフの意味を考えて正解するお子さまと、習ったことがないということからあきらめてしまうお子さまがいます。

このセクションに該当するような問題は低学年の間は存在しません。しかし、低学年時でも絶対に気をつけておくべき重要なポイントがあります。

「習っていないからできない」と言わせないこと
低学年のどの教科の勉強をしているときも、普段から「問題文をしっかり読みなさい」「一度考えてみなさい」「こうしたらどうなるの?」「こうするためにはどうすればよいの?」など、わからないものを考えるように話かけてください。小6になるまでは絶対に言い続けてください。

知識を探求する

理科の学習は「知識に始まり、知識に終わる」です。知識を学び、分類し、知識を使って考え、過程を重視し思考し、知識なしで考えることができるようになった後、最後はまた「知識」です。厳密には、「知識欲」です。能動的に調べる習慣のある子どもは、学力が向上します。

「正しい考え方が身につけば、同じ考え方で問題を解くことができる」のが理科です。理科は「実験・事実」という不変性があります。希学園の小6の授業では中学・高校内容のものを扱うことも少なくありませんが、これは単なる先取りや詰め込みのためではありません。物理・化学の本質は非常に単純明快で、美しい学問です。その美しさに触れて感動してもらうため、知識欲を刺激するためです。自分で調べ、思考し、本質に近づき、感動し、また次のステージへ……というサイクルに至った子どもは、向かうところ敵なしと言えます。



社会の学習方法

知識を増やす

「引き出しを作り、引き出しの数を増やす」段階です。

単なる詰め込み学習は苦痛を覚えやすい上、効率的とも言い難いのでおすすめできません。関連する事項を結びつけ、地図や写真を使って視覚的に印象づけながらの学習が基本となります。

記憶した知識は時間とともに薄れます。薄れさせないためには反復が必要です。希学園の学習計画では、地理・歴史・公民それぞれの分野について、スパイラルを設けています。

社会は、一問一答の形式で対応できる問題が多いです。この正答率を高めることで、社会科の「基礎点」を確保することができます。

知識の背景を押さえる

「引き出しの整理整頓をする」段階です。

「水力発電所の分布をあらわしているものを、次の地図(ア)～(ウ)より選び、記号で答えなさい」という問題があります。これに対して発電所と地図の組み合わせを、何種類も暗記する必要はありません。

水力発電所：急流である日本の河川の特徴を利用しているので、河川の上流部に多い。

火力発電所：化石燃料のほとんどを輸入に頼るので、大きな港湾のある臨海部に多い。

このように「背景を押さえる学習」を習慣づけることにより、「覚えなければならない事項」を減らすことができます。模範解答の文章を丸ごと暗記しなくても、要素をグループ分けして把握すれば良いのです。この「背景押さえ」により、点と点(知識)が線(関連づけ)で結ばれていくため、知識は自動的に分類され、引き出しの整理整頓につながります。これは次の段階のために必須の作業です。

知識を使って考える

多いとはいえすべてが一問一答の出題ではなく、これまで蓄えた知識のうち、どの知識が必要であるかを考えて対応すべき問題もあります。難度の高い正誤問題、図やグラフを用いた問題等です。入試問題では、分布図や統計を用いた出題も少なくありません。

これに対応するには「複数の引き出しを選ぶ」作業が必要です。このために、上記の二段階「引き出しを増やす」「引き出しを整理する」があります。

多くの場合、答えを導くヒント(あるいは落とし穴)が問題文中やグラフ・図表中にあるものですが、社会科の学習を一問一答の暗記と捉えている場合、ここに気づくことができなくなります。

社会科を好きになる

社会科は、「好きだけれど得点につながらない」ということがあまりない教科です。社会科に興味を持ち知識欲を持った子どもは、さらなる知識欲を満足させるため貪欲になり、得点力もあがります。つまり、社会科で高得点を取るためには、社会科を好きになることが最も近道です。

●地理分野

後述する歴史と異なりストーリー性がなく、ひとつひとつの知識の丸暗記をしなければならない、と捉えられることが多い分野です。実際は、地形や都市の位置、交通網等を視覚的に捉え、結びつけて把握することのできる分野です。まずは地図に親しむことです。家族旅行の際に、遠くの親戚の家を訪ねていくときに、地図に触れさせましょう。乗車する電車はどこを走っているのか、登る山は日本で何番目の高さなのか、その土地の美味しい果物は何か等、実際の見聞に勝るものはありません。また、日常生活の中でも、スーパーで買い物をする際に野菜や魚の匂に触れることができます。

●歴史分野

歴史漫画や伝記をきっかけとして好きになる子どもの多い分野です。ストーリー性があり、「流れ」「つながり」を把握しやすいことも要素のひとつでしょう。入試で配点の多い分野でもあり、歴史を好きになることは得点源として強い武器となります。武将や装束をきっかけに興味を持つことができたなら、その特定の時代を始点として知識を広げていきましょう。また、地理分野と同様に実物に触れることも有効です。寺社や遺跡、博物館等を訪れることで資料集にあるものを立体化し、知識も感動も深めることができます。

●公民分野

まずは新聞を読むことだ、と言われることが多いですが、このハードルは決して低くはありません。小学生向けの新聞であっても、取り組みにくい子どもにとっては「好きになるきっかけ」とはなり難いです。まずは、日常会話からです。食事をしながら、ニュース番組を見ながら、子どもが興味を持つことができるように話の内容を調整し、いま身のまわりで起きている出来事に触れてください。最近子ども向けのニュース番組も充実しているので、活用することもできます。

小2・小3公開テストについて

公開テスト

特に試験範囲を定めず実施する実力テストです。原則、公立小学校の既習範囲から出題しますが、学校進度により異なります。また、応用問題・発展問題を多く含み、難度は高めにお感じになることと思います。文字の大きさは、学校の教材より小さめの設定です。

初めて受験される際は、各教室窓口にて販売しております『公開テスト過年度問題集』にて、体裁や時間の使い方等に慣れておかれることをおすすめします。制限時間は、小2は国語・算数各25分、小3は国語・算数各30分です。

「わからない問題はとばし、終わったら何度でも見直しをする」ことが基本です。

持ちもの

受験票と筆記用具をお持ちください。受験票は、授業体験や季節講習等へご参加の場合、事前にお渡しいたします。事前にお渡しする機会のない場合は、公開テスト当日にお渡しいたします。筆記用具は、鉛筆(4～5本)と消しゴムのみで構いません。定規や赤ペン等は不要です。シャープペンシルもご使用いただけますが、後述のように画像データによる電子採点を行います。十分に濃く書くことのできる筆記用具をご用意ください。消しゴムも、よく消える機能的なものをおすすめします。

国語

問題用紙2枚、解答用紙1枚を配付します。

基本構成は、漢字の書き取り問題と長文読解2題です。小2はこのほかに、ことばの問題(接続語や擬態語等)を出題します。

漢字の書き取り問題の出題範囲は、「前の学年までに配当されている漢字」です。小2公開テストであれば小1までの配当漢字、小3公開テストは小2までの配当漢字が対象です。

長文読解は、書かれていることを正確に読み取る力が必要です。抜き出して答える問題や、記号を選択して答える問題がほとんどです。本文や設問の文章を、早とちりせず、よく読むようご注意ください。

算数

問題用紙2枚、解答用紙1枚、計算用紙1枚を配付します。

①番は、小問集合です。四則計算問題、単位計算問題を含みます。①番だけで、100点満点のうちおよそ半分を占めます。①番をきちんとおさえることが肝要です。

②番以降は、大問を3～5問出題します。いずれも(1)は比較的平易であり、(2)以降は難度が上がります。(1)を解くことができれば(2)へ、(1)を解くことができなければ次の大問の(1)へ進むことをおすすめします。

試験中の注意事項

- ・机の中には何も入れず、試験に臨んでいただきます。必ず鞆をお持ちください。
- ・携帯電話は事前に、音が鳴らない状態にしておいてください。
- ・問題の音読や不規則発言をなさることのないよう、事前にご注意願います。
- ・試験中に落としものをした場合や体調不良の際は、黙って挙手してください。
- ・試験中、保護者の方は入室できません。緊急のご連絡は窓口までお申しつけください。

解答用紙記入の際の注意事項

回収した解答用紙は、画像データによる電子採点を行います。正確な採点のため、ご記入の際は以下の点にお気をつけください。

① 受験番号・氏名を正しく記入してください。受験番号が間違っている場合、採点できません。

② 答えは解答欄の枠の中に書いてください。枠からはみ出ると正確に採点できません。

良い例  悪い例 

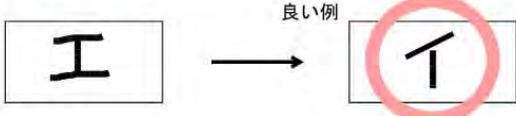
③ 答えを書くときは、濃く、はっきりと書いてください。薄い字は正確に採点できません。また、漢字指定の問題では一画一画とめ・はね・はらいなどもはっきりと書いてください。

良い例  悪い例 

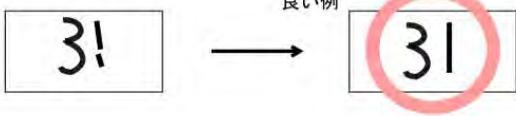
④ 数字ははっきり書いてください。特に「6と0」や「2と3」や「1と7」のような数字は十分に気をつけてください。明確ではない場合は正確に採点できません。

良い例  悪い例 

■ 「エ」とあやまって答えたので「イ」に直す場合

良い例  悪い例 

■ 消しゴムで消したあと、もう一度きれいに書き直す場合

良い例  悪い例 

以 上